

静岡県知事賞

親切の種

浜松市立可美小学校 四年

荒川 美和



「学校も友達も大好きなのに、学校に行きたくないな。」
私は二年生の時とても辛い事があって、学校に行きたくなくな
なった。毎日泣いていた。登校前は心がザワザワして、教室の
前では足が重たくなった。お母さんやスクールカウンセラーの
先生に相談したけれど、やっぱり心は辛いままだった。何をし
ても不安で、心が重たいままだ。どんどん自分に自信がなくなっ
て、ちがう自分になってしまった。

そんな時、となりのクラスの友達が、いつも私の様子を見て心

配してくれた。私はその子が心配してくれているのは知っていた
けれど、今の辛い気持ちを話す勇氣はなかった。

ある日、自由帳にすてきな言葉を書いて、やぶって私にくれた。
大切な自由帳なのに、私のためにやぶってくれた事におどろいた。
かわいいレターセットで書かれたお手紙もいけれど、そのお手
紙は特別で、すごくうれしかった。お手紙には、

「いつも元気でいようね。」

と書かれていた。そしてまた別の日には、ぬり絵と一緒に、

「二年生のときは、たすけてくれてありがとう。つぎは、わたしがあげてるからね。」
と力強く書かれていた。

私は友達にお手紙をもらって辛くなくなったわけではないけれど、元気がもらえた。自分の事を心配してくれる友達がいる事、クラスがちがっても気にかけてくれた事がうれしくて、心がポカポカした。それに、友達が私が一年生の時にした小さな親切を覚えていてくれた事が、何よりうれしかった。

その友達は、給食が苦手です泣いてしまう事があった。私は少しでも給食が好きになるように、はげまし続けた。私はわずれかけていたけれど、友達はわずれずにいてくれた。

小さな親切は、大きな親切になって私の所に返ってきた。私が一番こまっている時に。自分が見れていないだけで、心から心配してくれる相手がたくさんいる事に気づいた。この事が私に勇気をくれた。たよれる相手は、すぐそばにいるのだ。

私はこのけいけんをいやな思い出として終わらせず、こまった人を助ける親切に変えていきたい。人の辛さが分かった分、親切を大切にして、友達と関わっていききたいと思った。

小さな親切で、だれかの悲しみをすくうかもしれない。私はそんなさげない親切が出来る人でいたい。

辛いけいけんは、きつとこの先もある。けれど、一人じゃない

んだと思うと心強い。そして、勇気はいるけれど、助けをもとめて良いということが分かった。その事をまわりになやんでいる人がいたら、そつと伝えたいと思う。

「あなたは一人じゃないよ。」

